

平成24年度の特技懇を振り返って

巻・頭・言

平成24年度 特許庁技術懇話会 副代表委員
編集委員長 篠塚 隆

特技懇誌の発行は、昭和25年にまで遡ることができるそうです。休刊していた時期もあるようですが、現在まで継続して発行されています。したがって、特技懇誌は、その時の特許庁を取り巻く状況や会員の関心事を知る貴重な資料といえます。特許庁入庁以来、一会員に過ぎなかった私が、その編集に携わることができたことは、大変光栄なことであります。この場を借りて感謝申し上げたいと思います。

私が編集委員長として編集した最初の号(266号)の特集は、「人材育成」でした。新しいことにチャレンジすること、新しい知識を吸収していくことは、審査官、審判官にとって特に意識しなければならないことだと思います。ややもすると、日常の多忙な日々で埋没しがちです。今、振り返ってみると、特技懇の編集委員長の役目を果たすこと自体が、私にとってのチャレンジであり、研修であったように感じます。就任後、「人材育成」特集を初めに企画することになったのは、とても偶然とは思えません。

ところで、編集委員会は、私を含めて6名で組織し、特技懇誌の企画、執筆の依頼、原稿の校正などを各々で分担しながら行いました。その中でも最も重要でありながら、私どもが苦労したものは、特集の企画でした。今、本誌の読者がどのような情報を欲しているのか、読者に有益となる情報は何かであるのかに加え、知的財産制度の向かっていく方向、知財や技術について巷で話題となっている事柄を、キーワード化するなどして把握することから始めました。そして、これらのキーワードをまとめ上げて特集として具現化し、最終的にはその特集に相応しい記事を取り揃えていったのですが、この特集、この記事のラインナップでよかったのだろうか、後から悩むこともありましたが、しかし、特技懇誌として発行されていくプロセスは、ものづくりそのものであり、発行日当日に、出来たての冊子を手にしたときは、それまでの苦労

も吹き飛ばす程、嬉しかったことを思い出します。

特技懇の2大事業といえば、特技懇誌の発行と懇親会の開催ですから、懇親会についても触れたいと思います。懇親会は、新正会員の紹介も兼ねていることから、入庁後すぐに受講しなければならない審査官補コース研修が終わり、少し落ち着いた7月頃に開くのが、それまでの慣例でした。しかし、一昨年の震災により、急遽、開催時期を11月に移し、平成24年度も同じ頃の開催となりました。晩秋のピンと張った空気の中で、新正会員代表の少し緊張した挨拶が会場内に響きわたっていたのを今もはっきりと覚えています。

一方、特技懇の他の活動に目を転じますと、会員の皆様の自己研さんのために、平成24年度も、各種勉強会やセミナーなどを多数、企画し実施しました。それらに参加され、有益な知識や人脈を得た会員の皆様も多いことと思います。私も、これらの企画のいくつかに参加させて頂きました。そこで感じたことは、参加している会員の皆様が、何事にも謙虚であったということでした。特許の審査や審判の対象は、基本的には技術であり、その技術に向き合うには、謙虚でなければならないからだと思います。技術官たる審査官、審判官の原点を再確認できたように感じます。

刺激的な毎日を通じた平成24年度の副代表委員と編集委員長としての活動は、この特技懇269号の編集をもって終わることになりますが、今後も、特技懇は、その歩みを止めることなく、会員の皆様のために、その活動を継続していくことでしょう。

最後に、突然の原稿の依頼にもかかわらず、快く引き受けて頂きました執筆者の皆様、会の運営に尽力された、常任委員、常任幹事の皆様、そして、校了日までの残り時間が少ない中、機敏に対応した編集委員の皆様、深く感謝いたします。ありがとうございました。